

# 前田伊都子さんと紙芝居



## リード芦屋新聞

### 40年以上の相棒と

発行元  
芦屋市立  
あしや  
市民センター  
リードあしや  
記事  
吉原大翔

リードあしやで10月2日、子供たちのためのイベント「あんあーと」が開催された。このイベントに参加した、劇団あおぞらドラマカンパニーで脚本家、俳優として活躍する前田伊都子さん（62）。劇団で活躍する一方、子どもたちのために芦屋市で紙芝居を読み聞かせる活動をしている。紙芝居の活動を始めてから40年以上が経つ今日、どのような思いで活動をしているのかを取材した。

前田さんが読み聞かせをする紙芝居の種類は豊富

### 子供だけでなく保護者も

#### 流れる時代、受け継がれる物語

子どもの頃に演劇を始め、現在も芝居を続けているという前田さん。その前田さんには、ジュンク堂書店に勤務していた時期があった。

勤務をしていた書店で開催された「子供の本のフェスティバル」というイベントをきっかけに、紙芝居についての勉強を本格的に始めた。そこから40年以上、紙芝居に関する活動を続けているといい、人生の半分以上を紙芝居と共に過ごしている。

前田さんは紙芝居を読み聞かせる活動をする中で、

で、40から50本を所有している。学校の図書館においてある教育紙芝居や、本屋さんで簡単に購入できるもの、ロングセラーの作品などが数多くある。そのため、子どもだけでなく保護者も楽しめるようになってきた。

紙芝居の中には、幼稚園や小学校生に向けた昔話や起承転結がわかりやすい作品のほか、中学生向けの沖縄戦関係の作品もあり、ジャンルの幅広さに驚かされる。開催されるイベントに

よって作品を変えるだけでなく、その時の会場の状況に応じて作品の変更をするため、多くの紙芝居を持ち歩いている。

今回のこのイベントでは、『こ機嫌の悪いコックさん』『おおきくおおきくおおきくなあれ』『たべられたやまんば』など計4作品を紹介していた。紙芝居の途中で子どもたちと作品を通じた交流することで、子どもたちの視線を紙芝居に集中させ、一体感を持って紙芝居が進んでいった。



子どもたちと関わる際には、始める前に心を通わせる行動をするよう心がけているという。今回のイベントでも子どもたちと手取り

ズムをとるなどしてコミュニケーションを取ってから作品に入っていた。子どもから保護者まで幅広い世代の人たちに紙芝居

### 青い空に絵をかこう

#### 阪神・淡路大震災から学んだ経験



や演劇を通して大切なことを伝える前田さん。やりがいを感じることを尋ねると「子供たちや保護者の方が

年齢関係なく集中して真剣に紙芝居を聞いてくれるときです」と語ってくれた。

紙芝居以外の活動としては、子どもの頃から続けている芝居の他に、朗読劇の脚本作りという活動がある。

「青い空に絵をかこう」という前田さんが書いた朗読と演劇を一体化させた朗読劇と呼ばれる作品は、1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災の被災の教訓を伝える内容。震災を知らない人に当時の様子を伝えていく責任を感じているといい、芦屋市の中学生を中心にこの朗読劇を披露している。

2011年3月11日、東日本大震災発生をわずか4カ月前に東北地方の人

が、この朗読劇を演じてくれた縁があり、宮城県仙台市の人たちと今でも交流を続けているという。

「阪神・淡路大震災で被災し、家が全壊して一度は芦屋市外に避難したが、やっぱり芦屋から離れられな」と強く思った」といい、「規模の小さい街だからこそ伝えたいことが伝えられ、小学生のころからよく物事を考えているこの芦屋市で活動できることは幸せです」と語った。

この芦屋市の中で一番好きな場所は芦屋川だという。春は桜が咲きほころび、夏はホタルが飛び交う。

# 宇宙の面白さを

## リード芦屋新聞

発行元  
芦屋市立あしや活動センター  
リードあしや  
記事 寺本 空未



### 大塚進康さんのモバイル作り教室

大塚進康さん（81）は、日本宇宙少年団六甲分団の分団長として現役で活躍している。精道小学校ではペットボトルでロケットを作ったり、天体（満月、土星）観測をするイベント

を開催。幼稚園では宇宙飛行士の人の動画を流したりした。子供たちと関わるイベントに参加している。

私のイベントの案内は、必ず宇宙の好きな子どもがいる保護者に向けてつくるようにしています。その理由は、小学生以下の子どもは、保護者の理解がないとイベントに参加できないからです。

イベントに参加してくれる子どもは、だいたい保護者が宇宙が好きなことが多いです。しかし最近、子ども自身の興味も高くなっ

### 子供たちとの関わり

自由な発想力を作品に



てきていると感じています。大人も子どもと一緒に

なって、宇宙の面白さを味わってほしいです。

リードあしやのイベントに2年ぶりに参加してみると、予想以上の参加者がいてびっくりしましたが、子どもに興味を持ってもらえてうれしかったです。このイベントのモバイル作りでは、子どもが自由に色を塗ったりして、一人一人個性の溢れる作品をつくっていました。

私が宇宙に興味を持ったきっかけは、中学校の時の担任の先生が理科の先生で、望遠鏡を使って月のクレーターや土星を見せてくれたことです。私は、この先生のおかげで今もこの活動ができています。2033年に宇宙に行くことや空飛ぶ車に乗ることを目標に、100歳まで生きたいと思っています。





# リード芦屋新聞

発行元  
芦屋市立  
あし活ター  
市民センター  
リードあし  
記事未  
寺本空未

## 人との関係を大切に

小野山純子（おのやま・じゅんこ）さんは、昔アナウンサーだったのが、今は対面やオンラインを使いながら声屋で話し方教室をしている。リードあしやで開かれた「こどもひろば あんあーと」で、小野山さんの話し方教室に参加した子どもは、はじめ緊張してあまり話せていなかったが、練習していくうちに上手くなり、最後には、堂々とした姿でハキハキと大勢の人の前で話せるようになっていた。小野山さんが語った。



## 話し方教室の小野山さん

話し方教室では、綺麗な声で綺麗に話すことを目的とせずに、人との関わり方を学べるような内容になっています。人との関係作りでは、友達作りや友達との会話を弾ませるコツ、自分が言いづらいことをどのように伝えれば、自分の気持ちを率直に伝えることができるのかなどのレッスンをしています。

他にも平日には、研修講師として全国各地を飛び回り、社会人の人に職場でどのように人と関われば良いか、話し方のレッスンを通して、子どもたちが変化してくれるのをとても嬉しく感じています。

のかについてレッスンをしています。この活動を始めたきっかけは、私自身が学生時代に人前で話すことが苦手だったから。自分と同じように困っている人がいるのであれば、私の解決策を伝えることで、そのような人をなぐしていきたくと思ったか

らです。私は会社に入り、研修係になってから人前で話さないといけない状況になり、話し方のトレーニングをしたことよって少しずつ自分の意見を伝えられるようになりました。自分の意見を伝えられるようになったきっかけは、自分の声が伝

わる楽しさを知ったこと、自分が話したことよって人が喜んでくれる時の感動を味わえるようになったことだと思っています。この教室には障害のある人も通っていて、障害のある人は、家族の人以外に関わるきっかけがなかったり、話す機会がなかったり

していました。しかし、この教室で話すことで、気持ちも前向きになり、外に対する興味が芽生えました。いろいろなことに興味を示すようになり、人とも話せるように。他にも、授業中に発表ができない子どもが大きな声で発表できるようになりました。



## 子どもの意見を反映できる芦屋に

この活動を通して、子どもたちは、自分のことを声に出したりすることが好きなんだと感じました。だから、その楽しさを味わい、自分自身を表現でき、挑戦できる場所を作ることが大切だと思います。大人が子供の声を聴けるようになってほしいです。子どもが「できた」と思う体験が多くなればと思います。

そして、これからの街作りやイベントに子どもの声他にも相手に安心感を与えることを大切にしています。安心感は、言葉だけでなく、態度でも示すようにしています。聴くということ、相手の気持ちを理解することに繋がります。関係も作りやすくなると思っています。

## 言葉とともに、態度で

### 安心感を与えるために

子どもたちと関わる時には、子どもがどのように感じているのか、どのように思っているのか聴くこと

を大切にしています。これは、子どもだけでなく、大人も話す時も私が一番大切にしていることです。

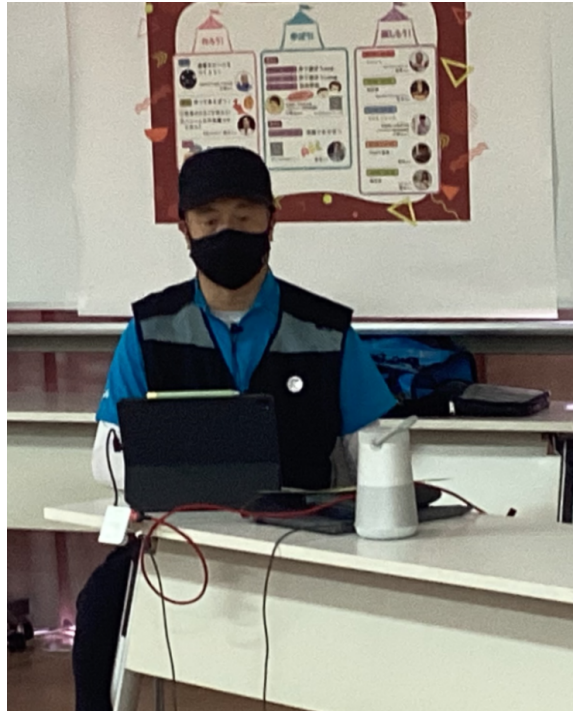
安心して、言葉だけでなく、態度でも示すようにしています。聴くということ、相手の気持ちを理解することに繋がります。関係も作りやすくなると思っています。

が反映されるような芦屋になってほしいと思っています。子どもたちがイベントなどの企画段階から参加できるように、プレゼンできるような環境が当たり前の街になってほしいです。伝える力を磨くことは、生きていく上で大切です。いじめられている人をなくして、安心して自分の能力を発揮できるようになってほしいと思っています。

学校では、コミュニケーション能力を高める授業を進めていってほしいと思っています。安心して働ける環境作りにもつながっていくでしょう。このような街にするために私も協力していきたいと思っています。

発行元  
芦屋市立  
あしや  
市民活動  
センター  
リードあしや  
記事  
吉原大翔

# 音楽と歩む日々



## 岡田明彦さんとDTM

精道中学校で校務として働いている岡田明彦さん（63）はDTM（デスクトップミュージック）という手法で楽曲の制作に取り組み、中学生にもその技術を伝える。芦屋市で一番好きな場所は、職場である精道中学校という岡田さん。DTMに関わり始めたきっかけと、今を生きている中学生たちへの思いを取材した。

岡田さんは高校時代、友人のギター弾き語りを聴いたことをきっかけにして、音楽に関わり始めたという。

中学校の校務員として働

いてきた岡田さん。50代に突入したある日、「今の音楽はどうなっているのだろうか」と疑問を抱き、機材探しをしていく中で、島村楽器ららぽーと甲子園店の

## 日々、勉強と挑戦 子どもたちのため、私のために



パソコンやiPadなどコンピュータを使って音楽をつくり出す手法。ライブ活動をしなくても、YouTubeに動画をアップした

り、1人でギターを弾くだけでなく他のパートの音楽も自分で組み合わせて、合奏することができるといふ。この出会いがきっかけと

なり、岡田さんはDTMについての勉強に没頭していった。

一人一台iPadが導入されるのは遠い未来の話だと考えていた。さまざまな事情によりiPadが一人一台導入されたのが2019年。その後、新型コロナウイルスよって一斉休校となり、生徒に使い方を教える場がなくなりましたという。

店長さんに出会った。店長さんに教えられたのが、DTM（デスクトップミュージック）だった。パ

精道中学校の校務として働く中で、新型コロナウイルス流行前は昼休みになる子どもたちが岡田さんの

部屋の前を集まってきて、ギターの弾き方やDTMについて教えてほしいと言ってきた。その質問一つ一つ

に丁寧に答え、iPadを使うと合奏ができるということと説明していた。当時は学校教育の現場に

アドバイザーをして、生徒と信頼関係が築かれた。担任の先生が知らないようなことも知るようになり、驚かれることもあったという。「学校の先生と違い、校務の仕事はノルマがなく、子どもたちのやりたいことをできるのが利点だ」と語った。

## 校務員として中学生と交流



iPadや音楽のことだけに限らず子どもたちからは、山の地図の見方や、方位磁針の使い方などを質問されることもあるという。一つ一つのことに答え、それらを使った実習を一緒にしているという。

トライやる・ウィークで受け入れ先が定休日の日、岡田さんは先生に頼まれて子どもたちと一緒に学校で活動をする機会があった。会話の中で、先生のことが話題となり、盛り上がりた。すると生徒が本当に悩んでいることを打ち明けるようになり、悩みを聞いて





発行元  
芦屋市立あしや市民活動センター  
リードあしや  
記事  
谷村京美

# 笑顔にするマジック

## 芦人認定者の板東伸彦さんに聞く

10月2日にリード芦屋にて開催された「こどもひろば あんあーと」で、マジックを披露した芦人認定者のキャプテンマジックこと板東伸彦さん（65）に話を聞いた。

板東さんは元々学生の頃にマジックのサークルに所属していて、現在もさまざまなところでマジックをしている。今回は子どもたちに向けたイベントだったが、高齢者施設などで披露することもあった。

子どもから高齢者まで、幅広い世代にマジックを楽しんでもらうために気を付けていることは多い。

披露するのが大人でも子どもでも、「90%おしゃべりのマジック」を心がけている。特に子どもや高齢者には現象の分かりやすいマジックを理解しやすい言葉、イントネーションで行うようにしている。このよ

うなスタイルになったのはきつかけがある。以前、板東さんはプロの落語家と話す機会があった。「その時に、どんなマジックの内容が良くても『不思議でしょう』というだけではお客さんにストレスを与えてしまうことがあるということに気づきました」。これがきつかけで、とにかくお客さんに喜んでもらえる、笑顔になってもらえるマジックに変えたという。



## 小さな工夫ひとつで人の心に寄り添うパフォーマンス



板東さんは子どもたちに披露するとき、大人よりも細かい工夫をしている。

例えばストーリー中のセリフ。大人には笑ってもらえる言葉でも、それが子どもたちにとって良い言葉とは限らない。そういう部分は子どもに悪い影響を与えない言葉に変更しているそうだ。

また、同じ技でも使うものを変えることもある。たとえば現金を用いるマジックは、子どもたち向けにはおもちゃのコインを使う。今回もステージを見る子どもたちのためにストーリーを変更していた。見に来ていた皆さんの親子の笑い声を聞いて、マジックを見て笑顔になってもらいたいという板東さんの思いが伝わってきた。

これは、子どもたち向けにはおもちゃのコインを使う。今回もステージを見る子どもたちのためにストーリーを変更していた。見に来ていた皆さんの親子の笑い声を聞いて、マジックを見て笑顔になってもらいたいという板東さんの思いが伝わってきた。これからも人に寄り添った板東さんのパフォーマンスは、見ている人の心を温かくしてくれるだろう。

# リード芦屋新聞

発行元  
芦屋市立あしや活動センター  
リードあしや  
記事  
京谷村

## 作る楽しさを伝える

### 芦屋Tioクラブ西本佳子さんに聞く

10月2日に開催された「こどもひろば あんあーと」で子どもたちにおもちゃ作りを教えた芦人認定者の西本佳子さん（76）に話を聞いた。

西本さんは市民団体「芦屋Tioクラブ」の代表を務めている。「Tio」とは、T：地域でV：いきいき▽O：おもしろくーの略である。

主にイベントの時に活動しているそうで、おもちゃ作りだけでなくボランティア音楽会や腹話術もしている。また芦屋の自然や風物詩の写真展なども行ったりしている。



今回のイベントでは、「恐竜のたまご」「ペンハムのコマ」の作り方を教えていた。

西本さんは、子どもたちにおもちゃ作りを教えるうえで大切に行っていることは何かという質問にこう答えた。

「子どもが自分でできるまで待つことです」。小さな子どもにとつて少し難しい動作でも、急かさずに自分でできるまで一緒に試行錯誤するようにしている。それは、子どもに作ることの楽しさを感じてもらいたいからだ。「子どもたちが自分の手で作ったおもちゃを完成させたときの『できた!!』というキラキラした笑顔を見るのが、何にも変えがたい喜びです」と続けて話した。

子どもたちにおもちゃ作りを教えている西本さんも楽しむことが出来るようにプログラムを工夫している。「いくつになっても、子どもの心を忘れないで遊ぶという気持ちが大事だと思います」と話している。作り方を教える側も一緒に遊んで、面白いことを共有する。そうすることで完成したときの喜びをより一層感じられるそう

## 子ども心を忘れない 次世代に繋げたい手作りの温もり



今の子どもたちが遊ぶおもちゃは機械的なものが多くなっている。「おもちゃ作り」には、ただ作って遊ぶだけでなく、そのことを通して、現代まで伝わっている昔の遊びの伝承記録を、次の世代に繋いでいく役割がある。目にするものが少なくなった手作りのおもちゃにしかない温もりを、活動によってさらに子どもたちに広げてほしい。



# リード芦屋新聞

発行元  
芦屋市立  
あしや活動  
センター  
リードあしや  
記事  
寺本 空未

## 英語を楽しく勉強

リードあしやで開かれた「あんあーと」で、達城あや子さんは子どもたちに英語の手ほどきをした。子どもたちが英語で名前、出身地、好きなものを言えるよう、幼稚園に入学する前の幼児から小学生までの参加者にレッスンをした。

### 達城あや子さんの教室

子どもたちは、まったく英語がわからなくてもリズムに合わせて先生の言ったことを真似することで、楽しく勉強ができ、自然と英

語が話せるようになっていった。英語では当たり前だが、下の名前で呼ぶことで生徒同士だけでなく、先生とも親しみやすい関係が作

られていた。達城さんは丁寧に話を聞き、まずは日本語でも良いので、話ができるよう笑顔で話しかけていた。子どもたちは緊張もほぐれ、楽しく勉強していた。



### 子どもたちと公平に向き合う

達城さんに聞く

子どもたちを教える上で大切なのは、一人一人と公平に向き合うことです。芦屋という町が障害のあるなしに関わらず声を掛け合える人が集まる街になってほしいと思っています。

子どもが英語を学ぶことが当たり前になっていく今、母語である日本語を大切にしていけないといけないと思っています。

学校で英語を学ぶということは、テストがあったりするので、嫌な思いを持つてしまいがちです。だからこそ「楽しく学ぶ」ということが、大切になってきています。

私は英語が苦手な子が大好き。そんな子を伸ばしていければと思っています。

## 「関係」を大切にレッスン

達城さんは、今回のイベント以外にも、芦屋市の「お笑い英会話」や神戸アイライト協会で教室を持ち、多くの子どもたちに英語を教えている。

このような活動を始めたきっかけは、「英会話を楽しくできるような環境を作

りたい」「障害のあるなしに関係なく、学べるようにしたい」と思ったからだという。

今回のレッスンでも、最後には子どもたちが自分の意見をしっかりと伝えるようになっていた。カードを作ったり体を動かしたりす

ることで、記憶に残りやすく、分かりやすいレッスンとなるよう工夫がされていた。

このように子どもたちとの関係を大切に、楽しさを追求した授業が印象的だった。